



さかな釣り

やがて雨は上がり、つややかな若葉と鳥たちの鳴き声が、なんとなく梅雨の訪れを覚えてくれているように思えた小学4年生の頃、いよいよ鮒を釣りに行くことを決意した。

この日が来るまでに、すでに準備は整っていた。裏山から選んで切ってきた竹を竿にし、裁縫箱からミシン糸をもらって、池に仕掛けを投げ込み、二人はただじっとウキを見つめたまま立っているだけだった。やがてウキが沈んだ。竿を立てると、すぐに小さな鮒が宙を

買っていたが、簡単な仕掛けだった。いろいろな話を聞いた話で、不思議と自分で作ることが出来たのを感じてい



aburayamayu

舞った。バケツに水を入れ、鮒を活かした重いバケツを持ち、弟と二人息を切らしながら帰り道を急いだ。家に着いてもすぐに鮒を眺め、心は誰に對

してでもない優越感と達成感にみちあふれていた。一時は現在、あの池を訪ねてみると変わらぬ雰囲気の中、水面下にはブラックバスの姿がある。昔ながらの生態系を乱す害魚などと言われることがあるが、連れてきたの

投稿 夫婦盃 (みょうとはい)

一、楽しい夕餉(ゆうげ)の夫婦盃 君と僕、苦節を過ごした四十余年 感謝の気持ちを込めて一杯をぐっと飲んで明日のために お互い汲み合う夫婦盃

二、理智にとんだ若き君 何と家を興した君の努力 終(つい)に愛を誓った祝い酒 いついまでも夫婦愛(ふうふあい) 楽しい浮世くみ合う夫婦盃

三、君も僕も辰年同志 愛し合った君と僕 無常の風にさそわれて 心に痛む毎日を 独り悲恋の一人盃(ひとりはい)

は人間、その勝手な行動が、鮒たちの生息に大きな影響を及ぼし、実は後から来たブラックバスにとっても迷惑な話ではないかと思っている。 どちらの命も美しい。しかし、生まれ育った昔ながらの自然に戻したい！ そう思うのは僕だけだろうか。

短歌とエッセイ 市山 節子

野生のイルカ(天草)

人間の歓喜の声を聴きとりて野生のイルカが笑顔を見せる 五秒間、ジャンプをしてはまた潜る客の熱気に応えるイルカ 白き腹のかがやき見る瞬間にシャッターを切る歓声のなか リーダーの指示を待ちいる気配して海中うごめくイルカの群影 船頭を曳きまわすごとく移動するイルカは技を試しているかも 好奇心に跳ねるイルカと人間の熱気が交錯す天草のうみ

投稿 京都短信 「葵祭り」 堺谷 和正

京都の三大祭りと言え、葵祭り(上賀茂、下賀茂神社)、祇園祭り(八坂神社)、時代祭り(平安神宮)である。 この中で一番早い祭りが葵祭り、例年は五月十二日であるが、今年は雨で十五年ぶりに順延され十六日となった。



「興」 瑞峰書

早崎海峡のイルカクルージング

島原半島の口之津と、天草の五和町の有明海の急流が出入りする早崎海峡には、野生のイルカが見られることを知り、友達と船に乗りました。 七十種類以上もいるというイルカの中で、早崎海峡で見られるのは、バンドウイルカで約三百頭も定住しているとの事。潮流が速くてプランクトンが豊富な為、小魚が多くイルカにとって良い条件が揃っているのだそう。水族館などで飼育されて、演技をするイルカ等と比べると、野生のイルカは大海原を、家族や仲間と自由に泳いでいるので迫力が違います。船の上からイルカと目を合わせたり、母イルカに寄り添って泳ぐ可愛い子イルカも見ることができました。

勇壮なジャンプは、なかなか見られないとの事でしたが、運良くジャンプの瞬間も見ることができ、水しぶきを上げて出てきた巨体を上げる一瞬間と歓声の場面は、今もインパクトのある新鮮な映像として忘れられません。



大切なのは、一人ひとりが、新しい「緑」、美しい「青」にめざめること 6月5日は「環境の日」・6月は「環境月間」 現在の社会は、地球の自然・環境を資源として築かれています。その結果、森林は伐採され、石油など化石燃料の消費などによる温暖化がすすみ、海面上昇により沈みゆく島や土地、消えゆく命があるなかで、様々な資源、エネルギーをいまだに奪い合い、深刻な事態に陥っている現実が存在し、特に、東日本大震災の原発事故の発生で、原子力の見えない影響に疑心暗鬼となり、それまで良好だったコミュニケーションが奪われてしまう事態も発生しています。環境の日、環境月間を契機に、「未来の生命」について考え、「自然・生命の和、循環」に根差したそれぞれの場でできる行動、活動が強く望まれ、今この瞬間からも求められ、迫られています。